

2022 年度第 1 回日本学連幹事会議事録

【日程】 2022 年 6 月 4 日(土) 19:50~22:00

【場所】 新潟県新潟市 新潟ユニゾンプラザ 小研修室 3
(オンライン参加も可とし、ZOOM を利用した。)

【議事録作成者】 鈴木 璃土(筑波大学,責任者)、
祖父江 有祐(筑波大学)、鎌倉 京平(筑波大学)

【目次】

1.JOA と高体連(高校登山部)とのコラボ企画について	3
2.ロスジェネインカレ報告	5
3.2022年度インカレミドル枠配分に関する東北大の意見書について	6
4. インストラクタ講習会について	11

出席者（敬称略）

氏名	役職	学校名
山川 克則	副会長	東京大学卒
谷野 文史	理事	筑波大学卒
浴本 悠貴	幹事長	神戸大学
坂巻 朱里	副幹事長	十文字学園女子大学
中野 海斗	会計	神戸大学
永山 遼真	事業部長	筑波大学
大石 遥	事業部員	新潟大学
松本 萌恵	事務局長	神戸大学
荒木 孝大	事務局員	広島大学
鈴木璃土	広報部長	筑波大学
祖父江 有祐	広報部員	筑波大学
鎌倉 京平	広報部員	筑波大学
近藤 花保	普及部長	名古屋大学
宮川 葵衣	普及部員	東京理科大学
鷺津 加子	渉外部長	東北大学
衣笠 匠斗	会計監査	東京大学
谷川 友太	技術委員	名古屋大学卒
安田 壱耀	北東学連幹事長	福島大学
市川 竣介	関東学連幹事長	筑波大学
島田 智也	東海学連幹事長	名古屋大学
徳力 雅哉	関西学連幹事長	立命館大学
松崎 莉子	中九四学連幹事長	広島大学

(注)議論の本筋と関係のない会話は適宜削除している。

1.JOA と高体連(高校登山部)とのコラボ企画について

村越：高体連を通じた普及活動について。

1980 年から国体種目として登山種目に。踏査の種目は「山岳オリエンテーリング」とも呼ばれる関係性。登山競技からもオリエンティアを輩出している。

私は伊豆の研修所で山岳部を対象とした読図の講習会をしている。

インターハイの種目でも読図の課題が課されている。インターハイを目指すような登山部では読図能力の向上への意欲が高い。昨年のインターハイ出場校は、県内トップクラスの進学校を始めとする高校が多く、オリエンテーリング部のある大学との親和性も高い。コースの途中にある目印の地点を当てる課題も課される。登山部向けの読図講習を、オリエンテーリングの普及活動にもつなげられないか。

オリエンテーリング側のメリットとしては高校生にオリエンテーリングを知ってもらう機会となる、進学時の選択肢となる、社会的貢献による知名度の向上などが考えられる。高体連側としても読図ナビゲーションの能力向上というメリットがある。

課題としては、地域的偏りや費用面などが挙げられる。

指導を希望する学校を JOA、高体連登山部で仲介してオリエンテーリングの地域クラブや大学クラブとマッチングする構想。

現状として、2021 年、高体連向けオンライン講習を行っている（約 300 人が参加）。全国高体連からは大卒の承認ももらっている。JOA のナビゲーションインストラクターに高体連登山部代表者が参加した。個人的にも神奈川県の高体連での指導を行っている。8 月にインターハイ監督会議で広報、秋頃からの実施を検討。試行段階であるので模索しながらやっていければ。

浴本：課題の点として費用負担を挙げているが、これまでの取り組みでどの程度の費用が発生したかを教えていただきたい。

村越：今までは各県の高校の先生をしているオリエンティアがボランティアベースで行っている。オンラインの講習会は村越が費用を負担、無給でやっている。

クラブがやる場合は交通費の負担はする予定。指導料を取るつもりはない。

数が少ないうちは試行的に行おうと考えているが、数が増えて来たらどうするかは未定。大学生がやる場合は持ち出しにならないようにしないと難しいだろう。

谷野：学連側に求めることは人の提供か？高校生に教えるとなっても、オリエンテーリングの説明こそできて先方が求めるようなナビゲーションの教育ができるのか、大学生に対し事前に講習などはあるのか？

村越：指導に興味のある人材を提供していただきたい。

両者がマッチングしていくことなので、一致しなければ無理に行うことはない。

その中で、オリエンテーリングの指導は経験がありノウハウがあっても、それが登山に通用するかというとそうではない。しかし 80%程度は共通であると考えているし、その足りない部分については JOA がこれまで積み上げてきたノウハウをもとにすれば補えるだろう。

大学クラブとしても、一般の人に何を提供していけばよいかというノウハウを蓄積できるというメリットがあるだろう。

谷野：やってみないと、というところもあると思うので、1 例作って学生と共に考えていくのが良さそうに思う。

村越：余談ではあるが、静岡 OLC では 2 年で 30 人程度メンバーが増えており、その多くは大学時代にオリエンテーリングをしていない層。そういった層にむけたイベントの用意などもあるが、オリエンテーリング外の人との交流で、クラブが活性化するという側面もある。

浴本：これからの流れとしては、JOA や高体連、日学の間で詳細を詰めていくということか？

村越：基本的にはそうなる。ただ枠組み自体は複雑ではない。「何県のどの高校がどんな指導を望んでいる」ということを、広く広報してもよいし、県が決まっているならば A 県の〇クラブとか、〇〇大学という形でピンポイントに依頼を流すこともあると思う。

浴本：事業部か普及部管轄になると思うのでお願いします。

2.ロスジェネインカレ報告

谷野：ロスジェネインカレは日学主催で行った。開催概要は資料の通り、参加者数は選手権 184 名、一般クラスは 124 名。

会計は黒字 65,8000 円、矢板塩田修正に 5 万、活動支援金として人件費に 45 万、学連に 158000 円寄付した。

開催による効果。ロスジェネ世代に対して活躍の場を提供し、満足してもらうことができた。

学生への資金援助については、65 万の黒字ということで一定の援助になったのではないかと考えている。

また、この大会を通じて様々な大学の学生同士の結びつきを作れたのではないか。次回への提言というわけではないが、運営ノウハウの継承や黒字を目指すイベントを日学で開催してもいいのではないかという所感。

資料に詳しい会計等は記載している。寄付は振り込み済み。

衣笠：ロスジェネインカレの成績の取り扱いとしてはインカレ本体とは関係ないものとするということか？

谷野：インカレ本戦とは別の扱いになると考えている。

鈴木：公式 HP への掲載は不要か。

谷野：無いと思っている。報告書だけ掲載という形でいいだろう。

鈴木：ではしない方向で行く。

谷野：主催は日本学連。新たにページを作る必要はないと思う。

浴本：お知らせとして掲載をお願いしたい。

3.2022年度インカレミドル枠配分に関する東北大の意見書について

浴本：まずは前回幹事会の話振り返る。

2月末に議論をおこなっている。2021年度インカレに東北大が出られなかった関係で出場枠が10から5に減少した。これに対して3つの措置案(+その他)が考えられている。

当時幹事会内で投票を行い、その結果最大得票は従来の規約を適用するものであり、この方針を進めていくこととしている。

このとき、従来通り規約を適用する主な理由として、事後に救済措置を認める前例を作り出すことが望ましくないという意見があった。

谷野：前回議事録で確認したいところ

基本的に枠配分は技術委員会で決めるものである。これは学生では決め切れないためである。今回のコロナ対応について、技術委員会で決め切れないから幹事会で決めてほしいということであったか、技術委員会の谷川さんに確認したい。

谷川：技術委員会としては、何もなければこれまで通りで決定していいのではないかと考えている。

浴本：技術委員会の意見としては何もなければそのまま進めていいということで、日学で方針の変更があった場合もそれを進めていいのか？

谷川：意見書を読んだ限り、宛先は技術委員会となっているので、まずは技術委員会が判断することになると思う。

谷野：つまりはまずは技術委員会で判断するという認識か。

浴本：前回の枠配分に関する議論において、栗生さんと話す機会はあったか？

谷川：前回の時は栗生さんと雑談のような形で話した。

永山：栗生さんが北東学連の枠減少を気にかけて端を発した議論だったと思う。

前回雑談のような形で話した際は、幹事会で決定すべきというような内容であったか。

谷川：幹事会でそのような話題が上がるようになったので、栗生さんと少し話をした。

永山：今回こういった話が幹事会で上がったということを技術委員会に話した上で技術委員会に回答をしてもらおう。

衣笠：例年通り技術委員会が枠振りを行い、それに対して技術委員会が問題意識をもたなかったとしても幹事会や東北大学が問題意識を持ち、意見書を出すこと自体は何も問題が無く、むしろあるべきことであるだろう。

浴本：整理する。意見書を技術委員会に送り、その判断を日本学連に委ねるのであれば、それを伝えていただいて議論するということか。

衣笠：インカレの枠配分に関して提案することはできても決定権は技術委員会の方にある。しかし技術委員会が学生の意見を求めるのであれば幹事会で議論をする必要がある。

浴本：技術委員会に、意見書について幹事会としての意向を付随させた上で提出し、技術委員会へ判断を仰ぐ形が本来の流れと思う。

今回の幹事会でどのような意見が出たかを、東北大からの意見書と合わせて技術委員会に送付し、技術委員会内で決定してもらう。あるいはその上で技術委員会が幹事会に判断を委ねる場合は再度幹事会で議論し決定する。という流れでよいか。

谷川：その流れでよい。

浴本：進め方に意見のある人はいるか。

近藤：日学の意見としては前回の幹事会で投票した現行のルールに基づいて枠配分を行う、でよいか？それとも意見書を踏まえて今回の幹事会で議論をするのか。

浴本：今回の意見書を踏まえて今回の幹事会で議論を行う。議決は取らない。

谷野：現在調査中であるが、技術委員会に決定権があるのか、計算権があるのか不明である。

衣笠：調べた限りでは日本学生オリエンテーリング選手権の実施規則では配分方法については別途規則に定めますと書かれている。

枠配分については例外規定などは設けられていない。選手権実施規則自体には実施規則の不適用についての項目が定められており、枠配分の逸脱もこの流れに則って行うのが適切だろう。

谷野：学連で決められるかが問題。技術委員会が取りまとめたものを認めない場合は、技術委員会および理事会で話し合うという流れか。

永山：特例については技術委員会及び理事会承認を経て、実施規則不適用とする形になると

考えられる。

坂巻：規則を変えなければならないということは総会の承認が必要か？

谷野：インカレ実施規則の逸脱事項として行うので理事会と技術委員会の承認のみだろう。

永山：技術委員会と理事会に、学連幹事会としての意見書を提出することになると思う。

鈴木：その場合前回幹事会で決めた決定は無かった事にするという事か？それともそもそも決定権は無いので撤回するという事か？

永山：前は意向を示したということになるのではないか。

松本：日本学生オリエンテーリング選手権ロングディスタンス競技部門の実施規則に計算方法、配分方法が計算されている。それに基づいて技術委員会が計算することになっている。

解釈の問題かもしれないが、技術委員会はきまっている計算方法に基づいて枠配分を計算するという事なのではないか。

衣笠：その規則はインカレ選手権実行規則に掛かっており、理事会及び技術委員会の承認があれば実施規則、ここでは計算式を変更できるという解釈だった。

谷野：どちらとも解釈できる。制度がうまく機能していないという側面もある。
今のところ総会に投げていない時点で変更していないため決定ではない。

永山：取り急ぎ今は幹事会としての意見をまとめるべきと思う。

浴本：今回は東北大の意見書も踏まえた上で幹事会の意見を募集する。

まずは前回の意見を変えたいかどうかを議論する。

ここで意見をまずまとめる。

1. 前回決定から方針を変更しない 2
2. 方針を変更する 17
3. 棄権 0

変更しない

徳力：規約に従うべきで決定を不用意に変えるべきでないと感じた。

大石：規約が簡単に変わってしまったら規約としての意味がないのではないかと思います。

変更するべき

鈴木：まずは今回の件で北東学連が不利益を被った。それに対して反対意見が出たがそれを考慮しないのは良くないだろう。

2020 年の北信越学連でのケースは北信越側に不利な決定を受け入れるかどうかを聞き、その上で受け入れるということだった。

日本学連全体の公平性と、北東学連の不利益のバランスを取った決定をするべきである。

浴本：今回の東北大からの意見書について、前回幹事会で出た不適用の前例を作るべきではないという意見への反論に納得した。

2020 インカレスプリントについて、今回の意見書を踏まえてこれは前例に当たるのではないかと考える。

谷野：アドバイスとして。変えるか変えないかが大事である。結局日学としてなにを目指すのかがポイントであるだろう。何を優先するかを決めるべき。

また、東北大と話し合ったほうが良いと考える。

浴本：谷川さんに 1 点質問。幹事会でどういったことを聞きたいか、技術委員会としての考えを聞きたい。

谷川：特にない。この件について意見はある。

総会というのがあったが、総会になる場合は規約の改訂なのではないか。

今回のように規則から外れたことをする場合は、理事会の方に回すことになる。総会に回すのは違うのではないか。

東北大の意見書があるにしても規則通りに枠配分を行えばいいのではないか、というのが技術委員会としての考えになるだろう。

永山：意見書を読んだ感触としては、3 の一昨年の枠を全て採用というのは、今年開催されたインカレミドルを無視することになるのではないか。

他の学連についてもコロナによって出られていない大学がある。こちらも考慮する必要がある。

関東ももっと枠が増えたかもしれない。全国に対して学連枠として増枠するのがよいのではないだろうか。

浴本：これまでの話をまとめる。北東には減少分の 5 枠を与える。さらに他の学連が納得できるように、日学枠として全国に向けて 5 枠ほど増枠するということ。

浴本：(東北大学である鷺津さんに向けて)東北大として 1 が受け入れられないのは納得できるが、2 ではなく 3 を選んだ理由はなにか。

鷺津：前回幹事会で藤澤さんが議論していた中で、2 は難しいのではないかとということで、3 の方が可能性があるということで 3 を推す形にした。東北としてはまず 1 を回避したいという考え。

祖父江：コロナの影響で減枠した場合というのはどのように判断するのか。毎年 1 枠程度の増減はある。

鈴木：前回の決定時には北東学連のみ適用するとしていた。

浴本：一度ここで票をとり、再度臨時幹事会で議論する。

投票

1. 従来通り
2. 北東学連のみ ICMR2018 の枠数を適用
3. 全学連について ICMR2018 の枠数を適用
4. その他 (永山：北東学連は 2018 を採用、全国に対して日学枠を設けて平等性をできるだけ保つ)

1 : 0 票

2 : 5 票

3 : 8 票

4 : 6 票

4. インストラクタ講習会について

山川：全日本リレー直後となるかもしれないが要項を出す。JOA の内部資格のみとなったため価値が下がったとにならないよう、中身があるものにしたい。

テーマを「統一性と独創性」に絞る。対面授業と実習を 7 月 2,3 日に行う。岐阜県協会への申込を先に済ませておいてもらえると助かる。困難事例とその解決事例を取り上げ、有意義な講義とする。別用があるため基礎論については坂野さんに任せる。zoom も併用してカリキュラムを組みなおす。

普及部を学連の申し込み窓口とするようお願いします。

浴本：会議室の都合上今回の幹事会はここで終了とする。

議題が残っているため、近く臨時幹事会を行う。

以上